2025 4/4 週刊読書人

可能性があるという見解は興味深い。代が移れば、必然的に変化をめぐる状況も変わる。二〇二〇年からにわたり世界を覆ったコロナ禍中には音楽を通じた「リアルな場」が失われ、インターネット世界が一気に存在感を増すことになった。その演奏系人気ユーチューバーがひしめく今、ポップ文化は新しいフェーズに突入しており、誤解されずに言えば、プロ、入り乱れる戦国時代の様相を呈している。一方、閉鎖的だったクラシック業界に風穴が空き、より多くの人々に扉が開かれたという意味でも、学びきことども思う。本書は二〇一三年から年の間に発表された文がベースとなって主に扱われている「コロナ前まで」のである。成熟期の次に果たして何が来るか。著者・本間千尋のような研究考察を楽しみにしたい。（しもやまずか＝ピアニスト、ちんま・ちひろ＝二〇一九年慶大学理工学部准訪員。）

絵本とは何か

松本 猛著

起源から表現の可能性まで

紙の本が売れない中で、絵本は驚くほど、よく売れている。小さな子を持つ親だけでなく、自分自身で絵本を愛する大人も増えているのだ。

本書は、「絵本とは何か」「絵本の表現」「絵本の歴史」「絵本の可能性」の四章に分かれ、全方位からの絵本論と言ってよい。どの視点からも密度高く書かれ、特に絵本を学びたい人には、最適の本と言えよう。

絵本はどういう表現ジャンルなのか、絵画、漫画、紙芝居、図鑑、画集、映画などと比べられ、単なる子ども対象でなく、自由な表現ができるメディアとして分析されている。

絵本の表現については「いつ」「どこで」「誰と」「何を」「なぜ」「どのように」という5W1Hで分析され、時間的要素が入ることにより、ストーリー性は生まれる」「絵本制作のヒントが視覚であっても、プロット作りには言葉が関与する」「擬音語と画像が組み合わさると、リアリティがうまれる」など、単純でない言葉、画像などの組み合わせにも注意を向けている。

一九二〇年代のエイゼンシュタインによるモンタージュ理論は、映画だけでなく、絵本解析にも役立っている。複雑なイメージ、同一地点でカメラの向きを変える視点の水平移動の「パン」、カメラ自体を横に移動させる「トラック」、異なる場所や対象のカットを交叉に写す「カットバック」、視点を前後に動かす「ズーム」などだが、画面転換の時、一つの画面が次第に消えて行くに連れて重なって次の画面がでてくる繰り返しの「オーバーラップ」を、子どもたちに親しまれるシンプルな展開方法としている。

それらを解説しながらも、「絵本の鑑賞者には、絵本解釈の自由がある」とか「絵を見るということは、豊かな世界を心の中に生み出すよろこび」などという言葉が嬉しい。

本書は、絵本に関わっていた絵本作家（瀬川康男、長新太、安野光雅、いわさきちひろなど）や出版人である至光社の武市八十雄氏、福音館書店の松居直氏など先輩たちの暖かな気持ちに包まれている。特に本書は、松居氏の著書『絵本とは何か』の同名タイトルを引き継いだオマージュとしていて、松居氏と松本の心の交流が偲ばれる。

また、いわさきちひろは、松本の母親であり、松本は子どもの頃から、その制作の場にも時々いたのであろう。いわさきちひろの絵本、『戦火のなかの子どもたち』『ことりのくるひ』『ふたりのぶとうかい』などを、暖かな目でよく見ている。

筆者は、大学に勤めていた頃、授業で大判、オールカラーの完全収載の絵巻物などを見せたりすることがよくあった。非常に高価で用意するのが大変だったが、そういった現物に近いものに囲まれるだけで、学生たちの理解や作品に対する興味が大きくなるのを感じたものである。

松本が開設した東京のちひろ美術館、長野の安曇野ちひろ美術館の両館は多くの絵本作家と出会い、目を肥やす場を作っていることだろう。

本書の読者は、たくさんの用語が出てきて、覚えるのも大変だろうが、それらの用語を使いながら実際に絵本分析を試みてみるのをお勧めする。

最近の絵本のテーマの広がりとして、思想、生き方、戦争と平和、東日本大震災、原発事故、人種、老いと死、地球環境など多様な今の時代が浮かび上がっていることを単語として書いているが、これからの世界や地球を見ると、今の時代の絵本論としては、もっと強く書いても良かったかなとも思う。

筆者も絵本研究に携わっていたので、松本がシルクスクリーンによるインドの『夜の木』（タムラ堂）についてまで、忘れずに取り上げているのを感心している。また、松本は、これからの絵本として「電子書籍と紙文化」まで書いているが、「読者と共に作る絵本」など、読者の想像力をより活かす視点があったなら、絵本を中心に活動している人たちも紹介できたのではないだろうか。

（なかがわ・もとこ＝文教大学名誉教授・絵本研究者）

★まつもと・たけし＝美術・絵本評論家、作家、横浜美術大学客員教授、ちひろ美術館常任顧問。一九七七年にいわさきちひろ絵本美術館（現・ちひろ美術館・東京）、九七年に安曇野ちひろ美術館を設立。著書に『いわさきちひろ 子どもへの愛に生きて』など。一九五一年生。

全方位からの絵本論

絵本を学びたい人に最適の本

中川素子

A5判・238頁・2750円
岩波書店
978-4-00-022319-5
TEL. 03-5210-4000

全保障会議）型に編成するなど、ナンバー2の役回りだった。

一方で、安保会議常任委員の平均年齢は、一二年の五十七歳から二四年には六十七歳に到達した。プーチン体制の長期化で、人事が停滞し、硬直化していることが分かる。二四年からの第三次

会議の重要な任務は、外交・軍事戦略の根幹である「国家安全保障戦略」の策定で、本書で略文書が毎回の改訂で、リベラリズム、伝統的価値観の保守愛国主義条項へと変遷した経緯が記される。

会議の議長は大統領、書記が会議を牛耳り、つまり年から

徴だ。大統領府もロシア共和国時代の大統領府を前身とするが、二三年の大統領府の職員数は二千五百六十五人で、うち六百人強が地方にある連邦管区大統領全権代表部に勤務していることは初めて知った。

一六年に内務省軍が大統領直属の国家親衛隊に

門間対立を招く恐れもあるという。

ウクライナ戦争下でのクレムリンの権力機構分析もすぐれている。著者は、侵攻直後に権力の周縁部から不満や離反が出たものの、「シロヴィキ」勢力のみならず、経済・財政畠の中核的な国家官僚は本部内で戦争に関与し、テレ

るゾロトフやワグネルの反乱収拾に貢献したデューミン補佐官らはFSO出身で、ウクライナ戦争を通じて主要アクターに浮上。クレムリンへの影響力を巡って、他の情報機関高官らと対立関係にあるとされる。実力機関内の主導権争いも今後の主目玉の一つだ。

実力主義の側面も持ち合わせているという。

こうした強固な大統領権力により、独裁者の後も「プーチンなきプーチン路線」が続くのかどうか、このあたりの展望にも言及がほしかった。

（なごし・けんろう＝拓殖大学海外事情研究所客員教授・ジャーナリスト）